■書評

板坂 元さんの『日本人の論理構造』に寄せて

藤原与一

この本を一読して、私は、なんと新書らしい新書であることかと思いました。〔講談社現代新書〕

内容が新鮮です。論述が、やさしくて高遠です。

読者は、この本のいたる所で、著者との対話をたのしむことができるのではないでしょうか。問答がしてみたくなるのではないでしょうか。まことに、この本は、魅力のある書物です。〝忘れがたく興味深くおぼえる〟（著書のことばづかい。一二五ページ）本です。

◇

ここでは、諸問題が、手ぎわよくとりあげられています。書物の目次からいくらかの小項目を引き出してみましょう。

日本語の論理性
のつぺらぼうの物差し
なるの論理
身体性の国語
場所を尊重する
体感的な時制
皮膚感覚的人間関係

こういったあんばいです。著者は、本書でとり上げた話題の大部分は、十何年間外国で生活し、その間、日本語をもつともよく解し、また解そうと努めている学生や学者の間で暮しているうちに、感じかつ考えて来たことの集積であるが、

と説明していられます。（「〝むすび〟にかえて」の中で）

板坂さんは、基本的には日本語と日本文学とをおさえつつ、日本人の論理や心理をさぐつて行〟（二二ページ）かれるのです。

その、ものを見つめるまなこは冷静です。それでいて、とりあつかうことはあたたかです。一例、「場所を尊重する」（一三四ページ）のところを見て下さい。

◇

英米でのご生活十数年、板坂さんは深い意味での日本語教育にたずさわられて、いよいよ境地を高められたかと、私はお察しします。そこのところで、比較文化論の眼を輝かして、日本人の立場から、問題をとらえられます。諸問題は、すでに著者の手で体系化されています。私などは、そのみごとな問題把握（――理解）に、ただ驚かされるばかりなのです。

秩序ある問題指摘のどこをとつても、読者はすぐに、著者との共同思考にはいつていくことができるでしょう。著者の指摘の的確さに、ひざをうたれることでもありましょう。一問題、「身体性の国語」（一一七ページ）など、早くご判読いただきたいものです。

こうして著者は、日本のものを探究しながら、かつ、

「日本の」とか「日本的な」という修飾語を、捨て去りたいのである。……、結局四海の内はみな同胞であるし、またなければならないと私は思う。（一九五ページ）

と述べていられます。私は、本書を再読して、この書はまつたく板坂さんによつて必然的に産み出されたと感じました。必然の書こそ、じつは、個人の著書と言えるものかと思います。

◇◇

独自性の顕著なこの本は、著者がのびやかにその思考の展開を見せる場所です。広い社会で練磨してきた著者の卓抜な問題感覚を、縦横に見せる場所です。行文は、おのずから流暢です。日本語表現法のひきおこしがちなあいまいさは、ここでほとんどみな、克服されているのではないでしょうか。

たのしく著者を追つていつて、私は、すこしの不安も感じることなしに全体を読み通し、読みかえすことができました。

行文の分析力のあざやかさを、一、二例、

見てみましょう。

だが、普通、日本語が論理的でないという表現は、日本語の背景にある文化や物の考え方の型が外国語のそれと喰い違うところがある、ということを非論理的に表現したものに過ぎない場合が多い。（二〇ページ）

知識がすでに出来上つてしまつたものとして無反省に肯定され、体制が与えられたものとして批判をこえて壁のようにそそり立つている、そのような社会の老化現象とその空しさに対して鋭敏にその危機を感じとつた新しい世代の目に、ある意味では泥くさい大江の道化師めいた挑戦が好感をもつて迎えられるのは意義なしとしない。（一一六―七ページ）

感覚自在、発想自在の行文を、二、三とりあげてみましょう。

……、身体の極度な接触が一日の時間割に組み込まれてしまつた感がある。（一二八ページ）

そこで、坊つちやんは、義理のルールをここで適用して、うらなりさんと山嵐に対して強い愛情を持つことを示すべきであると感じるのである。（一六七ページ）

どうやら、私は直接接触型であつたらしい。（一七四ページ）〈著者は、この段階のここに来て、こんな表現をしています。〉

◇

著者のものを読み解く力のするどさには、敬服せざるを得ません。古今の作品からの多くの引用がありますが、『源氏物語』も『山の音』も、その表現のひだ深くまでがこまかに読み解かれています。文学する心のこのつよさから出発して、著者は、内外の文献を、多方面にわたつて、求め読んでいます。こうした博大な活動の中できたえられた批評意識が、私どもに何をどう語りかけるかは、想像も容易なことでありましょう。

◇◇

著者は、たとえば第六章での「やはり、さすが」など、〝英語に翻訳しにくい〟（八九ページ）ことばをとり上げては、私どもを問題の正座につれていく手法をとります。限られた人々にのみゆるされる手法でしょう。ここで、私どもは、よく納得せしめられます。と同時にまた、こんなおもしろいお話しを、もつと聞かせてもらいたい、もつと聞かせてもらいたいという気もちにもなります。

私なりの関心をすこし申してみましょう。ことわるのに「けつこうです。」と言うのなどは、問題として、すぐにとりあつかつていただけるのではないでしょうか。いわゆるご用ききにことわるのにも、「きようはいいです（よろしゅうございます）。」などと言つてもいます。日本人は、「いいえ。」と単純に言いきるのをにがてとする国民ではないでしようか。なおさまざまの話題をもつて、著者のもとへ参じたいこころがします。そして、それらと本書全内容とを合わせたところで、私は、日本語表現法の、文表現法での文末決定性を、著者に、「日本人の論理構造」の解明と説明のため、改めて問題にしていただきたいのです。（講談社、昭和46年8月16日発行／新書判、216ページ／240円）